

◎ 受賞作品集

目次

太田玉茗賞 一篇 「繋がり」

加藤 丈夫

埼玉県寄居町……………6

優秀賞 五篇

「耳かき」

大江 豊

愛知県一宮市……………10

「櫛の木」

斉藤 礼子

岐阜県可児市……………12

「桐の花」

佐藤 静

山梨県甲府市……………14

「忘れ物で、戻りに」

日高 大輝

東京都大田区……………16

「青い翳り」

水木 萌子

埼玉県小鹿野町……………18

佳作 十篇

「ゆうき」

秋山 公哉

埼玉県桶川市……………22

「思い出がふるさと」

宇井 久

大阪府豊中市……………24

「天秤だこ」

ささき ひろし

埼玉県さいたま市……………26

「瀬音」

佐藤 健光

神奈川県横浜市……………28

「遠い空へ」

佐山 広平

愛知県春日井市……………30

「だいたげる」

田中 和美

大阪府枚方市……………32

「ちつとんべー」

中原 道夫

埼玉県所沢市……………34

「ふるさと伝承雨乞踊」

平井 辰夫

愛媛県西条市……………36

「冬<sub>の</sub>道」  
「古里を訪れて」  
村田 寿子  
吉村 金一

埼玉県さいたま市……………38  
佐賀県鹿島市……………40

市民奨励賞 三篇

「羽生・わがふるさと」  
「いしぶみ」  
「母の声」  
足立 紗奈  
大藤 征子  
塩田 禎子

羽生市東……………44  
羽生市南……………46  
羽生市南羽生……………48

◎ 選考委員紹介

秋谷 豊  
新川 和江

中村 稔

◎ 推薦委員紹介

新井 豊美  
飯島 正治  
菊田 守  
木坂 涼

石原 武

◎ 資料

経過  
募集要項  
応募状況



第六回

少室山詩

太田玉茗賞

# 繋がり

加藤 丈夫

秩父山間地に点在する集落は  
いずれも申し合わせたように  
こじんまりと寄り添い地面に張り付き  
大地の鼓動に耳澄ませている

その集落の周囲には痩せた耕地が拡がり  
百年前と変りなく  
きょうも家族総出の  
秋の刈り取り作業が繰り返されている

百二十年程前の明治十七年十一月一日  
僕のひい爺さん、浅次郎は妻子を残して  
隣村風布村の農民蜂起の一隊に  
農具の鋤を携えてかけつけた  
隊の中には弟の国作の顔も見られた

国作は、浅次郎のただ一人の兄弟で

ここの農家に入婿し  
今はすっかり地元で溶けこんでいる

国作の村では全戸あげての参加だが  
兄は遠く離れた隣村から仲間もなく唯一人  
この大事業にかけつけてきたのだ  
兄弟は今更に血の繋がりの因縁を思った

風布村の集団と同じような農民の群は  
秩父山地の谷間の村々から  
川の流れるように溢れ出し合流し大河となり  
吉田の棕神社に集結し鬨の声を上げた

それから百二十余年の歳月が流れたが  
秩父の山々は時の流れから忘れられた如く  
しかし静かに世の有様を見守っている  
きょう彼等兄弟と血の繋がる僕は  
双方の故郷の一望できる釜伏の山頂に立つ  
ここから二つの集落の傍を流れる細流が  
流れ流れて遥か彼方で合流し  
大河となって続いているのが望見される



第六回

小宮女と詩

優  
秀  
賞



# 耳かき

大江 豊

落ち葉を

追いかけている

影ふみ遊びなんか

夢中になつていたときでしょうか

足の裏の そのまた親指の指紋の

うずまきのあたりで、

あぶないよ

気をつけて

と聞こえてきたのです

耳を澄ませていると すぐに

聞こえなくなつてしまふのですが……

あぶないよ

気をつけて

と確かに聞こえてきたのです

ふるさとの井戸のまわりを

どれくらいまわつたときだったでしょうか

わたしは追いかけているが  
逃げていたのかもしれない  
落ち葉がつる草のように　そおっーと  
手をかけてきたものですか：：  
あの声を　あの耳かきのような  
うずまきの中の優しい道案内を  
十本の指先で、木漏れ日を探すように  
差し伸べて　掴もうとしていたのでしょう

そして、いくつかのうずまきの中に  
しゃがみ込んだ　そのときでした  
うずまきの中に石の階段が見えてきたのです  
あれは兄さん姉さんの足跡だったでしょう  
遠くの方で　落ち葉を巻き上げながら  
箒で、戸口の方へ筋道をつけていたのは  
いつもみんなの帰りを待っていた　母さん  
——黒髪を錘のように垂らしながら  
母さんの耳かきは　縁先で、  
いつも　わたしを　深い井戸から  
汲み上げる釣瓶だったのです

# 欒の木

齊藤 礼子

ふるさとの家の裏庭にあった 大きな欒の木  
空に向かい 枝をのばし 家の瓦屋根を覆う  
ように立っていた  
私たち子供は 起き伏しを欒の木に見守られ  
て育ったのだった

そして今 とうの昔に伐り倒されて もうど  
こにもないはずのその欒の木が 低く囁くよ  
うに 私に語りかけてくるのだ

梢を渡っていった風のこと  
木陰の道を 鋏を担いで通っていった村人の  
こと

枝々につもらせた雪のこと  
幼い私が 川でつかまえて木の根方においた  
盥のなかの沢蟹のこと

過ぎた日は消えたのではない　どこへ行った  
のでもない　しずかに時空を繚んでいくなら  
ば　すべては今もここにあるのだと　おまえ  
には見えないだけなのだ

だから　滔々と一日一日を流し去る　この眩  
しく美しい光にも　そんなに怯えることはな  
い　戦くことはないのだと

さみしく屈んだ背を見せて　冬枯れの野を  
一歩一歩遠のくように　老いていく

父よ　母よ

そして　父と母の掛けがえのない朝夕を

懸命に　守り支えている

山の麓のふるさとの家よ

おまえは何も失うものはない　これから何  
一つ失うものはないのだと　これからも何  
もうどこにもないはずの櫟の木が　今再び  
空高く枝を広げ　葉をゆらし　遠い日の  
あのなつかしい葉のさやぎのように　秘かに  
私に語りかけてくるのだ

# 桐の花

佐藤 静

家と農具小屋の間に  
桐の木が一本立っています。

女の子が生まれたら植えて

その子がお嫁に行く時、それで箆笥をこし  
らえて持たせるものだ聞いていましたが、  
姉が嫁ぎ、わたしが嫁いだあとも

その木は立っていました。

花は薄紫色の袋の中から品のよい

微かな香りをたてるので

わたしは今も

時々、その中へ帰ります。

木の下を歩き来する若き父と母は

何やら話しては明るい笑い声をあげ

犬はここにわたしがいることを知っています

みたいにやさしい目で見上げてのですが、

みんなとうに終わってしまつて

ここには もう  
桐の木とわたししかおりません。

花の中では  
安心しきって

とろとろと

とろとろと

それはそれは気持ちよく

微睡めます。

風が来て

懐かしい子守歌をうたってくれた日だつて  
あるのです。

家と農具小屋の間に  
その桐の木は立っています。

# 忘れ物で、戻りに

日 高 大 輝

とんでもないクソ田舎

そこで暮らすだけならともかく  
よく、こんなところで働くよな

ずっとそう思っていたし、

今も思っている

危うい国に頼ってばかりの田舎に

苛立ち

馴れ合いばかりの人たち

都会を映し出すテレビと

自分の現実の生活を混同しようとする

おろかで、あきらめのロマンチストたち

生きるってこういうことを言うのか

都会に出てみました

何もほとんど変わりません

変わっているのは

私でした

夢を片手に上京してきた若者

やり続ければ大成すると言ったって

結局、東京出身者が残ってしまう

そんなの許せない

そういう熱いまなざしに

思い知らされ

帰ろうかな

帰省すると蘇る

苛立ち

これが生きるということなのか

忘れ物だけを取りに帰りました

安らぎやたそがれはまだありません

すがってしまいたいけど

いません

故郷には忘れものがあるだけです



# 青い翳り

水木 萌子

傷ついて戻って来た

ふるさとは 雪

北風に荒々しく波立つ

紺青のみずうみから

つぎつぎと舞い立って

群れ飛ぶ白鳥の

鳴く声も哀しい調べ

水ぎわが白く凍りついて

浜辺は一面の雪野原

求めすぎたから傷ついたのか

うなだれて歩く私は

滑らかな雪肌をザクリと裂いて

青い陰影のくぼみを

卵のように産み落としていく

ふいに影が止まった

雪にまぎれて横たわった  
白鳥の亡骸<sup>なきがら</sup>を  
踏みそうになつて

猟銃に撃たれた傷に  
にじんだ血も白く氷結し  
空にもこの湖にも忘れ去られて  
死んでいた白鳥  
いや、死んだことさえ  
雪はかき消していたのだ

繁茂した青葉が枯れ落ちるのを  
そして命までさらう深い痛手をも  
雪は待ち受けて全て包んでくれる

ふるさとは 雪  
長くひきずっていた  
私の青くくぼんだ翳りも  
いつしか 雪の中へ  
帰って行った



第六回

・  
心算七上詩

佳

作

# ゆうき

秋  
山  
公  
哉

止めどなく落ちてくる雪の下で  
その人は父母の墓に抱きつき  
声をあげて泣いた

始めて知った父母の名前  
始めて知った自分の本当の名前  
でもその時  
父母はすでに亡くなっていた

中国残留孤児  
その呼称が許される時間はとうに過ぎていた  
顔や手に刻まれた歳月の深さが  
孤児という呼び方はおろか  
その人の年齢さえ裏切っていた

慟哭が墓石を覆った雪をとかしていく  
雪の下からその人には読めぬ文字で書かれた

父と母の名前が現れる  
そして教えられた  
自分の本当の名前

雪深い北国の小さな村  
父母の生まれ育った地で  
その人は  
長い年月と深いしわの代償として  
自分の名前を取り戻したのだ

その日生まれた娘に  
私は「ゆうき」と名付けた  
茨城県結城市大字結城  
私の生まれ育った町の名前

娘よ 自分の名前の意味を胸に刻んでおけ  
父のふるさとかから遠く離れたこの地で  
もし お前や父に何かが起きたとしても  
その名前がきつとお前を助けてくれる  
父がそう信じて付けた名前

「ゆうき」

# 思い出が　ふるさと

宇井　久

父ちゃんは大工で  
自信家で、  
儂の建てた家は、  
百年経っても  
びくともせんと言う、  
母ちゃんは  
とても信じていたわけで、  
いつもにこにこしてをりました。

お彼岸の一心寺いっしんじさんは、  
人がいっぱい、  
お線香の煙も一杯で、  
坊さんのお経は  
まるで歌のようで、  
芸人の無縁墓碑にも  
お花が供えられてあり、

前を通る人も  
手を合わせてゆくのです。

(3)

昔、

省線電車と呼んでいた頃  
沿線の家々の屋根は  
みな鉄色でありました、  
夕陽の中で、  
懐かしくて  
妙に侘しい  
鉄錆色でありました。

(4)

学校近くの  
お菓子工場から出る  
湯気のような煙は、  
キラメルの  
甘い匂いがして、  
僕達には、  
気の遠くなりそうなほど  
甘美なものでした。

(そんな時、あの戦争が始まったのです。)



# 天秤だこ

やととぎ ひろし

亡き父の日記を読み

十七の時に炭坑夫であったことを知った

貧しい家業を助けるために

土木作業や澱粉工場への出稼ぎのあと

上砂川の炭坑に就職する

汗と粉塵まみれになり黒いダイヤを掘っていたのだ

度重なる落盤事故で大勢の仲間が

亡くなるのを目の前にし転職を決意する

— こんな地の底で死んでたまるか

海軍志願兵募集のポスターを見て

親に内緒で応募すると六十名中二名が合格

仕送りをあてにする病気がちな父親の猛反対にあう

気丈な母親は男のようなゴツゴツした手で

息子の両手を取り  
ニシン場や田畑で鍛えた肩の天秤だこを  
さわらせ

—お前は見どころのある子だ

オラがもつと頑張るべえ

心配せず自分の選んだ道をいげばええ

家門の誇りだ めでてえ めでてえ

親戚を集め祝宴をしてくれた

お袋の天秤だこの硬さと温かみを思うと

その後のどんな辛い事にも耐えられたと

震える筆で綴ってあつた

幼い頃 まとわりついた祖母の肩

ときどき揉んだあの小さな肩に

天秤の物語がひそんでいたとは

北の女の逞しさと優しさが

天秤のように ゆうらり

記憶の襷から立ち上がってくる

故郷の大地が育んだ滾る血脈となつて

# 瀬音

佐藤健光

胎内の時から  
谷川の瀬音が聞えた  
町に出て労苦を越える時  
その音が背中を押してくれた。

田の少ない土地で  
昔は養蚕が盛んだった  
蚕がまゆになる前  
さわさわと桑の葉を食べて  
子供の私もカゴを担いで  
葉を摘みにいった  
小さな瀬音が急せき立てた。

秋には彼岸花の咲く道の先  
戦死した父の墓標がある所  
夏には蟬の合唱をすりぬけて  
瀬音が聞えてきた

骨つぼの中には

四、五枚のコインと

小さな骨が少し入っていた

遠地から送られてきたそれに

父のかけらがあったのなら

蟬の合唱と瀬音が

読経のように聞えるのだろうか。

私の耳なりは

ふるさとのあの

瀬音なのだろうか

いつの日か

胎内の中で私は再び

あの音を聞くのだろうか。

# 遠い空へ

佐山広平

遥かな夏に思いが飛翔する時のおとずれ  
眼が光に眩しい日  
夏の日差しがぼくをさそう

ぼくは遠くの記憶を求めて歩きはじめる  
すると

ミンミン蟬の鳴く夏が  
沢蟹の動きまわる夏が  
からすあげはの舞う夏が  
ぎんやんまの空をきる夏が  
ぼくの少年を覆う

ぼくは澄んだ山あいを歩いている  
校門にひとり佇む少年  
校庭は日差しのなかで少年たちの声を懐しん  
でいる  
校舎は少女たちのほほ笑みを夢見ている

だが玄関ホールの小屋根の上の時計だけが  
ただひとり時を刻んでいる  
時計を贖める町役場の屋根の風見鶏  
空にはさざ波の流れが映えている

町を流れる高原川の空に響く水音  
それは少女たちの水に戯まれる音  
少年たちが岩から飛びこむ音  
水底でかじかが驚き岩陰に身をひそめる  
蛙は急いで向う岸に泳いで行く  
川岸に咲く夏の花 わすれなぐさのもとへ  
風は優しく茎を愛撫する

遠い記憶の橋の上 ぼくは立つ  
すると  
少年はぼくに溶ける  
ぼくは少年に溶ける  
そして  
ぼくは赤い光に濡れて  
虚空に映える夕暮れを掌につつもうとする

# だいたげる

田  
中  
和  
美

だいたげる は  
相手に 好意的に  
使います

セクハラでも パワハラでも  
怪しい言葉でも  
ありません

すなわち  
抱いたげる  
では なく  
出したげる

この前 喫茶店に 行った時  
おごって もらったから  
今度は わたしが  
だいたげる

と 使うのです

ふるさとの  
そんな 言葉で  
はしゃぐ時

都会の飲み屋の 一室は  
ふるさと丸出しに  
なるのです

そして  
ひとしきり  
笑った後の 沈黙

ふるさとの  
だいてもらいたい  
気分です



# ちつとんべー

中原道夫

角にあった自転車屋も  
その隣でけっこう繁盛していた八百屋も  
その先の中華そば屋も床屋も  
すべて巨大なビルに呑み込まれていた

いつも買物客で賑わっていた  
商店街はすっかり寂れ  
街全体が新開地の郊外に移っていた

かつての雑木林や茶畑の上には  
コンクリートのジャングルが乱立し  
人の心もそれにならって  
無機質なものになっていた

——これが生まれ故郷だというのか  
裏通りを歩いていたら

「ちっとなんべー」という居酒屋があった  
子どもの頃使っていた懐かしい言葉だ

ちっとなんべーだけんど

いつも作り立てのぼた餅を持ってきてくれた  
おもと婆さんの顔を思い出した

ちっとなんべーだけんど恋をした

清ちゃんは美しく歳を重ねているだろうか

ちっとなんべーだけんど未来を語り合った

隆君はいまどうしているだろう

ちっとなんべーではない

思い出の一齣一齣が

古い活動写真<sup>ネ</sup>を見るように浮かんでくる

——いらっしやい

居酒屋「ちっとなんべー」の縄暖簾の奥から  
あたたかい故郷の風が流れてきた

# ふるさと伝承雨乞踊

平井辰夫

乾ききつて

固く締まつた唇のような土踏みしめ  
きみら

頭さげて輪になり

下向いたまま呻めきだす

呻めきが大きくなると

輪の旋回が速くなる

火焙る土鍋の中の煎り豆のように  
揆ぜるちからで

腰をおとしたまま跳ねあがる

仕草は蛙脅どしの跳ねるだけ

曲げた両掌の先は

肩先で僅かに招くだけの所作

てらてらと焚火の焰群がきみらを嘗める

うつむき

頸ふる

鍋墨の

きみらの貌にかさなつて

遠い祖先たちの血塗れた貌が舞い狂う

飢渴 困憊 桎梏 逃散

焼打ち

一揆 死罪に獄門

单调な太鼓の撥に拍たれる闇が

昔の木霊を呼び戻す

きみら深夜も呻めいて 跳ねる

遠い祖先たちに

世代の干割れが潤うまで

きみら化身が祈りの雨にうたれるまで

沈黙の呻吟だけの

きみら踊りはまだつづく

# 冬の道

村田寿子

あれ、母が家の前を通り過ぎて行く

あわてて夢の端を右手で掴んだ

そのまま手繰り寄せる 夢の在り処

そこには

あれきり逢えなくなった兄も居て

ビールを飲みながら巨人戦を観ている

私達が生まれ育ったあの家は取り壊され

町の様子もすっかり変わってしまったが

季節ごと庭で咲いていた花花のように

私の魂も あの土に根付いてしまったのか

あれは遠い冬の日のこと

学校から帰ると母が居ない

心あたりに電話して尋ねたものの

とうとう見当もつかなくなつて外へ出た

脳卒中を患った母は左手も左足も不自由で  
歩くことさえ容易ではない  
暗くなつた道をどれだけ捜しただろうか  
国道沿いの小さな八百屋さんの奥で  
お茶を頂いている母を見つけた  
身繕いもできない母を  
親切に呼び止め休ませてくれたのだ

礼を言つての帰り道

急に母が小用を足したいと言いだした  
見知らぬ家の戸を叩くのも憚られ  
しかたなく路地ともつかない草陰で  
覆い隠した母のこと……

十四の歳の思いはほどけ  
私は　また古里の道で立ち止まる

# 古里を訪れて

吉村 金一

水面にキラキラした波が立つのを

息をつめて見つめました

海に立つ波なら

金波 銀波と呼ぶならわし

でもダム湖の輝きは

水晶がくだけるように秘めやかです

浮いて下っていく秋霧を

忘れめや……と詠んだ歌人の想いも

いまでは水中に立ち枯れた樹に

とどまっています

たくさんの家屋の水没を想います

蒲団を敷いて眠っていた部屋に

薬罐から湯気のががっていた台所に

いまでは水だけが満ちているのでしょうか

いいえ 人間の記憶は

霧よりも魚よりも自在です

トントンとまな板たたたく音に目覚め  
ばあちゃんの そらおかわりの声聞こえて  
戸が開き遊びに誘う声がするようです

山上に移転した小学校まで歩きました  
つま先が少しでも落葉にふれると

落葉はすぐさま反応しました

何と言ったのかわかりません

それでも木の葉がはじめて

言葉を発したのを聞きました

歴史になっていく落葉と

歩きはじめた私

何だか 同じ言葉を使っているようで

私は道の真ん中で

そっと ふり返りました

校庭には人影すらないのですが

たくさんの友の笑顔を追いかけながら

心の鍵を探し合っていました

ひたすらスキの穂が湖面に波を立てている

魚のウロコのような秋の光が訪れていました





第六回

市民奨励賞

市民奨励賞

# 羽生・わがふるさと

足立紗奈

親とけんかした

涙ではなく怒声を吐いた　そんな自分に嫌気がさした

そんな時私は利根川に行った

自転車から降りずに土手を上れるあの道は

私のお気に入りに

かけ上がった

息が切れた

目の前に　川の流れが広がった

そこでようやく私は泣きたくなかった

土手の上から音は聞こえないが

その流れは何て激しく私の悩みをさらってくれるのか！

川に背を向け　振り返ると

私のまちはこんな緑があったのか

そう思わせる　いつもと角度の違う　羽生のま

その中に　ぼつん　私の家  
赤茶けた屋根が寂しそうだ  
そろそろ帰ろうか

最後にもう一度川とまちとを見回して

「ありがとう」

今度はきつと　ちゃんと話せる

さあ帰りはどの道を通ろうか

どこを行っても知り合いのいない道はない

羽生のま

土手を滑るようにかげ下る

# いしぶみ

大藤 征子

松原通りから裏へ入る路地

左に向かうと羽生駅に通じる抜け道

右に折れれば八雲神社の先に小学校があつた

家から神社境内を横切つて

小学校へ行く中間地点に平野医院の板塀

今傍らに一メートル二十センチの石碑がある

明治時代 自由民権運動を繰り広げた（通見

社跡）と彫られている

多くの先駆者を輩出した結社に

羽生市民が多数参加していたことを知つたの

は中学生になつてから

当時は何も知らず 小学校のかえり

「利根川までかけつこで遊びに行くべえ  
みんまでさあ」

「ゆんべは おめえんとこ 何食つたん」

と声を狭い小路いっぱい張り上げていた

あの頃学校の校庭にはいちよう並木がめぐり  
その実は宿直室で先生が焼いて食べさせてく  
れたり  
開いて見せた世界地図を渡り歩く駒にもなっ  
た  
放課後に沢山の本を読んてくださった先生に  
「保泉良輔を忘れるな」と聞いたことを思い  
出す

街中の路地の一隅にあるいしぶみは  
平成二年に建てられた  
その前を通りすぎるとき いつも  
関東のど真中の故郷にひそむ  
情熱の種火のあることを思う

※保泉良輔 明治九年埼玉県最大の民権結社  
「通見社」設立に最も積極的に深くかわり  
中心的活動家であった人

# 母の声

塩田禎子

空を見上げ

落ちてくる雪の白さに

遠い母を想う

白い紙をテーブルに広げ

たっぷり墨のふくんだ筆を滑らせる母

お前にはなんにもしてやれなかつたね

いのちに陰りが見え始めていた頃

どこかに忘れ物でもしてきたかのように

ぼつりと言う

近くの若い母親たちの願いを背負って

母は家の庭続きの場所で

保育園を創めた

小学校教師の時の年月を頼りに

小さい体を休ませる間もなく

仕事をこなした母

アルバムに残された

スナップ写真の笑顔のうちにも  
いつしか無理がかさんで  
体を横にすることが多くなっていた

いくつかの屋敷森のその向こうから

お帰りですよ——と

優しく呼ぶ声がある

母の跡を継いで盛り上げてきた

姉たち家族の園

子ども達の帰りを促す

先生のマイクの声に

母の声が重なることがある

雪は横から吹き上げたかと思うと

今度は前から吹きつけてくる

過ぎ去った人を連れて

私の周りを舞っているのだろうか